伽倻子のために

李恢成

伽倻子のために

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草172 A

昭和五十年二月二十五日 発行
昭和五十三年二月二十日 四刷

著者 李恢成

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊙ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本株式会社
© I Fue Song 1975 Printed in Japan

新潮文庫

伽倻子のために

李恢成著

伽倻子(かやこ)のために

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

前　章

R町が終着駅であった。

函館方面からやってきた二台連結の気動車はゆっくりと最後の枕木を押しつけて停った。

まもなくドアが開くと、通学の男女高校生や行商を終えた中年の女達がつぎつぎとプラットホームに降り立ったが、彼らはいくらか疲れた足取りを分ち合ってぞろぞろと手前の改札口の方へ向っていく。

もう誰もいないとみえた気動車からそのとき三十歳は越したとおぼしい男がひょっこりあらわれ、プラットホームの敷石を踏んだ。グレイのコートを身につけ左手に黒地の布カバンを携えただけの軽装である。降り立ったとき彼は眩しそうに回りを眺めたが、やがて思いついたようにもう陸橋のかげに姿を消そうとしている乗客のあとを追って、これもゆっくりとした足取りで改札口に向って歩き出した。

男の名前は林相俊といった。東京から十一年ぶりにこの町に訪れたところだった。彼にとってこの町の景色はすべて眩く思われる。

鉄道の構内は海をのぞんでおり、複線の線路を渉ってくる風は潮の匂いをふくんでいた。ある

かなきかに昆布の匂いが混ってくる。彼は鼻腔をふくらませ潮風を深く吸いこんだ。肺が海の闖入者にあわて出し忽ち混乱におち入っていくのがわかる。

上空で鷗が啼いていた。冬日の空を低く高く漂い、とみる間に風に流されてまた恣意に翻りケオケオと何をか町に告げながら翔んでいる。その声は賢しらげで、やや饒舌にきこえる。彼は自分がこの町にやってきたのを誰にも知られたくないのであった。

改札口を抜け、くすんだベンチがいくつか置かれている待合室をよぎると、小さな広場になっていた。今しがた気動車から降りたかつぎ屋の女達がゆっくりと広場をよぎっていく。大きな荷物のため彼女達の後姿は紺色のモンペとゴム靴しかうつらない。やがて荷物は人通りの少ない町のなかを左右に分れはじめ広場からひとつひとつ消えて見えなくなった。

林相俊は駅前のポストのわきでしばらく立ちつくしていた。ある決心を迫られていた。歩き出せばいいのだ。坂の上にある老人の家に向って。この町にやってきたのはそのためであった。その家で老人の仏前に焼香するためにはるばる東京からやってきたのであった。だが、なぜか気が重いのだ。向っていくことができぬのだ。

昼下りの町をかすかに波音が洗っていた。ふと彼は心を動かされた。そうだ、海にいってみよう。この町の海は十一年前の出来事とつながっていた。その年の冬の夜、彼は海を長いこと見つめていた。それから下りの最終列車で函館に向い、それ以来きょうまでこの町にもどることはなかったのだ。

そのときはもう二度とこの町には来るまいと心をきめている。来ようにもその理由がなくなっ

ていた。もはや他人の町となっていたのだ。

駅と人家のあいだに雑草の生えた小径がのびていて、百米ほどいったところに踏切がある。家々の軒下に吊された秋大根が目についた。大根は黄色く萎びており、もうすぐこの地方に雪が降り出すのを感じさせる。

踏切までくると、林相俊の眼差は自然にそこから見える遊興街に投げかけられた。いやな思い出がよみがえった。まだバー・タンポポはやっているのだろうか。彼はそう呟いてみる。「黒い花びら」という流行歌がはやっていた。背筋が寒くなるのをおぼえ、彼はいそいで眼を逸らした。

踏切を渡ってしまうと防波堤に突き当る。防波堤は駅の全長と同じ長さのもので海に沿って町を守っている。鷗の落し物が白ペンキの点滴みたいに付着していた。

防波堤に立つと、林相俊の体に潮風がまといついてきた。レインコートは風をはらみ膝頭をコートの裾が叩いた。彼は海からななめ横の姿勢で風をしのいだ。目薬を差したように目尻が涼しくなり、涙が滲んできた。

海は内浦湾といった。外海でないので波は高くない。海に面した防波堤の壁は五米ほどあって、テトラポットがごろごろと投げ入れられている。それは巨大な海星の化石みたいに見えた。波はテトラポットの爪に抱き取られ覇気を失い小さく砕けてしまう。

林相俊の視線はやがて浅瀬の一点に注がれ出した。波間に見えかくれしながら首を覗かせている一群の杭が見えた。杭は黒く濡れて光り、焼けぼっくいのようである。昔は舟着場であったのであろうか。しかしとっくに橋桁を失い、杭だけになったその残骸はなにか海の卒塔婆のように

無気味にうつってくる。
あの海の卒塔婆のようだとふと彼は思う。おれの心にも墓碑が沈んでいるのではなかろうか。焼けぼっくいのような心の墓碑が。
あのとき、と彼は思う。海に向っていくども問いかけたい気持であったのだ。おれは一体何に負けてしまったのだろうかと——。もちろん海は答えなかったし、黒々と闇を拡げ細波をたてていただけであった。
——過渡期なのだ。
——いまは過渡期の青春なんだよ。そう思ってこの試煉を乗りこえていくべきなんだろうな。でも、おれたちはきっとうまくやってみせるよ。
朴楚の言葉が波のうねりのように持ち上ってきて林相俊の心をとらえた。
やつならきっとうまくやるだろうと思う。三村真紀子とうまくやっていくことだろう。
林相俊は防波堤の上を歩きはじめた。そうでもせねばすまぬ気持だったのだ。しきりに自責の念が湧いていた。潮風が一層目に沁みてくるようだった。コートを叩く風が心まで打ちつけてくるように思われる。
そのとき遠くで汽笛の音がきこえた。汽笛は自分の内部から放たれた鋭いかなしみの声に似ていた。白煙を吐きながら急行列車がR町に近づいてくるのが見えた。遠くにそびえる駒ヶ岳をしだいに煙で包みあげながらぐんぐん近づいてくる。あの汽車に乗ってR町にやってきた頃のこと

が夢のようだった。その頃、R町は心の町だった。どれほど親しく感じられたことだろう。この町で知っていたたった一軒の家がその感情を優しくはぐくんでくれたのであった。そのときはよもやこの町が他人の町となるとは想像もしなかったのだ。

急行列車はR町では停らない。気動車でくるとR町は終着駅になるが、急行列車はもはやかつてのようには停車しなくなっていた。十一年前にはR駅で三十秒停車をした。あわてて彼は荷物を手にしてプラットホームへ飛び降りたこともあったのだ。

十一年の歳月は林相俊の周囲にもさまざまな変化をもたらしていた。彼は複雑な気持でR町を通りぬける列車の流れを眺めていた。

一　章

林相俊（イムサンジュン）がはじめてR町に降りたのは彼が大学に入った年であった。

一九五六年の夏、相俊は一年ぶりで東京から北海道S市の実家に帰ってきた。

彼は家に着くと、腑（ふ）抜けたようになり何日か過した。彼の父は息子が一日じゅう二階に閉じこもっているのを時たま、そっと覗きにきたが、それ以外のときは腫物（はれもの）にでも触るようにそっとして置いた。息子は一年前に家を飛び出し、突然もどってきたのである。フーテンか浮浪児になると思っていた息子はいっぱしの大学生となっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

相俊は父がそのことだけで自分に寛容になっているのがわかっていた。屋根裏部屋でころがっていると、「サンジュニー」と戸越しに声を掛けて入ってくることがある。用があるのかというとそうでもなく、ただ何となく入ってくるのだ。そんな父をじっと見つめていると父は尤もらしく立てつけの悪い雨戸を締め直して出て行く。父がいなくなると、彼はまたぼんやりと大の字になっていた。

一週間も経つと、相俊は義母に話して東京にもどる準備をはじめた。義母はおざなりのことしか言わぬから都合がよいのだ。しかし父ははや息子が東京へもどっていくのにびっくりしたらしく、もっとゆっくりしていくように言った。だがいったん思い立ったら結局そのようにする息子であるのを父はしっていた。家出したときもそうだったのである。

家を発つとき、相俊はS駅まで見送ろうとする父を何とか思いとどまらせ、玄関先で別れた。遠慮深くなった子供を父はどこかで哀しんでいた。たって息子を引き止めることのできない父にも遠慮があるのであった。

この関係が生じたのは相俊が家出し、もどってきてからである。父子はそれまでのようにお互いに絶望し合うようなことはなくなったが、奇妙に遠慮深くなってしまっていた。一週間のみじかい滞在中、これではだめなのだとなんどか思いながら、彼は何らなすこともないまま日を送ってしまった。家にもどったのは上京後、省みるところがあったからである。親許を離れた生活は彼に労働を強いた。その時分、彼は否応なしにいくつかの職業を転々としながら夜は予備校に通った。そして今春ある私立大学を受験したが運よく入ることができたのだった。

受かったときなぜか宙天の凧を想い浮べたものである。空中で平衡を失った凧がくるくると弧を描きながらそれでも地面に落ちずに低空で舞っているような——。受かったのはまぐれであったが、その頃から彼は父に会いにS市にもどろうと思いはじめたのだった。何故あのような拙い形でしか上京できなかったのかという悔いの感情が芽生えていた。

ところがいざ家にもどってからの一週間はかくのごとき様だったのだ。父が自分をそれとなく劬る気配を察すると彼はへんに心の扉を閉ざしてしまった。そして家出以来の疲れが出てきたようになりごろ寝ばかりしていた。だが、面と父に向うと妙に自分が遠慮をしはじめているのがわかる。父の挙措にも申し合わしたようにそれがあり、一刻もはやく東京に発ちたいという気持にさせられたのであった。わずか一年ばかりのうちに人間が暗くなったのかもしれなかった。

親を哀しませたという悔いがそのまま残ったが、相俊は急行列車でS市を後にした。

途中、彼は函館に近いR町というところで下車しなければいけなかった。父に用事を言い付かっていたからである。せめてもの罪ほろぼしであった。それにおじさんと久しぶりに逢えるのである。樺太で最後に見て以来、ほぼ十年ぶりで逢うことになるのだった。

夏陽がゆらめきR町は一皮剝けていた。相俊は水打ちしてある待合室を出ると、駅前広場をよぎっていった。父から手渡された地図通りに右手の角を折れ、日差しが影の町をつくっている鋪道をしばらく行って山手の坂を登りはじめた。坂道は日照りで赤茶っぽく乾燥していて轍の跡が硬い皺面をつくっている。坂の途中には下見板のとれた老朽した平屋などが立てこんでいるが、それらの家々が跡切れたところの右手は空地になり一段高い坂を登りつめた位置にまた家々が並

んでいた。そこで何気なく坂を振りかえると、盛りあがるような夏海の水平線がちょうど眼の高さになり、町は紫青色の海に沈んでしまっていた。

相俊は視線をかえ、坂の上の家々を眺めた。この何軒かのうちどこかがおじさんの家になるわけである。柾葺が剝けたそれらの家々はいかにも貧しげであった。

そのとき相俊は異様な光景を見つけた。

一人の少女を囲んで三人の子供達が攻撃をしかけ、体に触れようとしているのである。少女は中学二、三年くらいでお下げ髪をしていた。子供達の方はまだほんの小学二、三年生くらいである。その一人はいがぐり頭をごりごり少女の胸に押しつけ、もう一人の子は薄地のスカートを引っ張ろうとし、三人目の子が少女の腕にしがみついている。悪戯にしては淫らでへんに真剣な動作だった。

「こら、こら」と少女はしだいに泣き面になり、悪童共の頭や背中を掌で叩いた。しかしその手付はまるっきり力がなく、どこか手毬でもつくように頼りなくうつった。

相俊が近寄っていくと、子供達はぱっと少女から離れた。そして一瞬邪魔者をみる目付で彼を見上げたが急にきまりが悪くなったのか、柄の大きい鼻の頭に汗をかいた子が袖口で洟を拭い、それが合図のように子供達は一斉に蜘蛛の子を散らしてしまった。

少女はすばやくずれたスカートを直し、少し気まり悪そうに上目遣いに彼を見つめた。相俊は素知らぬ顔で少女に松本家を訊ねた。おじさんは通名を松本秋男といっていたのである。少女はきき終ると黙ってついそこの家を指さし、そのまま坂道の方へすうっと離れていった。

「だれだべね？」
半天にモンペ姿の小母さんは彼を見ると陽焼けした四角い顔に訝りの色を浮べた。それでも曖昧な笑顔を漂わせているが、場合によってはけんもほろろな応待をしそうなけんが彼女の容貌から感じられた。
「わかりませんか？　樺太のM町にいた――林の相俊ですが……」
やっと小母さんの眼に手懸りをつかめたような表情がのぼってきた。そのとき人影が小母さんの後ろでゆらめき、彼女がわずかばかり体の分だけ明けていた障子がいっぱいに引かれた。
「おまえ――サンジュニじゃないか！」
クナボジが仁王立ちになり、彼の名前を呼んだ。
相俊は照れくさそうに頷いた。これで身分の保証はついたわけだ。
「これは何の知らせだ。ウリ（儂）は夢にも見なかったぞ。どうして、こんなことが――。さあ、入れ入れ」
クナボジは息遣いがはげしくなり、相俊の手を取って薄暗い部屋に招き入れた。
「林さんにこんな息子さん、いたかえ？」
小母さんはまだ立ったまま相俊をためつすがめつしていた。
「何をいうんだ。林の男のバッチ（末ッ子）じゃないか。そうださ、お前が忘れるのも無理はねえ。あれからもう十年も経ったものな。それだべし、こんなにでっかくなるさ――」
クナボジは成人した彼を嬉しそうに見上げた。昔は相俊が見上げたものなのだ。歳月はそのよ

うに変っていた。おじさんはもう老人の年になっていた。

「らくにしろ、楽にな。ここはどこでもない、お前の家と同ンなじなんだから。ウリが樺太でどのくらいお前ン家で世話になったか。死んだお前の母さんはこのウリを兄さん兄さんと立ててくれて、真心から面倒ば見てくれたんだぞ。――そうか、よっく来てくれた――」

つい老人は涙を浮べ、脂で黄ばんだ指で目頭を抑えた。

「いやだね、とうさん。嬉しかったらなんにも泣くことねえべさに」

二人のあいだにちんまりと達磨のように坐った小母さんは笑いながら言った。彼女は日本人であった。戦後まもなくM町で老人と再婚した人である。

「そうじゃねえ。そうじゃねえんだ」

シャツ姿の老人は弁解するように呟き、背を屈めて刻み煙草をゆっくりキセルの雁首に詰め出した。

気ぜわしく一服吸うと、老人はS市の消息を訊ねてきた。父が言付けたのもそのことである。戦争が終るとどちらも二年ほどして樺太から引揚げてきたが、その後消息がわからず、何かのことで少し前から連絡がついたのだった。しかし生活に追われて老人と父はまだ会うこともできずにいた。老人は父より七、八歳齢が多く、父とは祖国の郷里が同じで二人は義兄弟の縁を結んでいた。そんなところから父は東京にもどる相俊をいわば名代として挨拶に寄こしたのである。

相俊は父が持たせてくれたおみやげを小母さんに差し出した。彼女は仰山に喜んで受けとると、立ち上って井戸から真水をコップに汲んできた。

「学生服ば脱げって。この暑いのに。今晩、うまい鮭ば喰わしてやるからな」
どうも、と上の空で答え、相俊は父について老人に語り出した。しかし、喋ろうにも彼は自分が父をごくありきたりにしか理解していないのに気づかされた。たとえば彼は父が生活を維持するのにどんな苦労をしているかといった観察は殆どしてこなかった。彼が見てきたのは生活の苦しさであり、父の愚痴であり家庭の暗さであった。だから、話はつい貧乏生活について触れられがちだったが幸いなことに一家健康であることを告げ、自分が昨年父と喧嘩して家出したようなことはそっくり伏せて置いたのだった。
気づくと老人達は深刻な表情で耳を傾けていた。小母さんは話をきき終ると日焼けした手首を一方の手で擦りながら、やっぱし、と失望したように呟いた。
「ゆるくないんだべさ。わしらときっと同ンなずなんだよ」
「小母さんも引揚げてから随分苦労したんでしょう」
どこも同じなのだなと相俊は思った。
「わやだったもの。はっちゃきこいて働いたって暮しさぼっかけられっぱなしなんだ」
渋い顔をして小母さんは喋り出した。「わや」というのは大変だということで「はっちゃき」は一所懸命という意味の浜ことばである。暮しに追いかけられている話を彼女がしているそばで老人は黙々と半紙を細く裂き、紙撚をこしらえていた。
そのとき静かに玄関の開く音がし、人影が障子にうつった。
「伽倻子か」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com